

非常時の『今』を考え、

子どもの心と学力を支えるための支援の在り方

高松市立鶴尾小学校
主幹教諭 藤村 久美子

1 はじめに

4月、学校が再開したのもつかの間、新型コロナウイルス感染症対策として再び臨時休業日となった。教員にとって、臨時休業日が長引けば長引くほど学習面ばかりではなく、児童の心の面が心配になる。新しいクラスを受け持つ新担任はもとより、2日しか顔を合わせていない1年生担任は、子どもとつながれない、子どものことを理解できないつらさをひしひしと感じていた。本校の学校教育目標は、「人権尊重の精神を基盤として、自ら考え実行できる、人間性豊かなたくましい子どもを育てる—子どもに寄り添い子どもを大事にする「子どもファーストの教育校」—」である。こういった、非常時における「子どもファースト」の考え方から、教員が「今」しなければならない児童の心のケアについて、何ができるかを考えていくことが喫緊の課題だった。

2 実践の内容・方法

(1) 実践の概要

感染症に対する不安や心配が広がる中、学校がいつ再開されるかも分からず不安に思っている児童・保護者が多い。そこで、児童の心を支えるために考えた取り組みが「先生あのね お便り交換」である。これは、教員が各児童の家庭ポストに学習課題と葉書（未使用）を届け、子どもたちは、届いた葉書に自分の思いを書いて教員宛てに投函するという支援方法で、1週間に1回の運用を計画した。

学校に届いた子どもたちからの便りには、教員が返事を作成し、次の週に新しい葉書とともに届けるお便り交換システムを臨時休業期中繰り返すことにした。



お便り交換の仕方、葉書の寄付の依頼を記したプリント

(2) 実践の具体

○ 第1回：子どもの「心を支える」

1回目の「お便り交換」は、学年だよりに、担任が一人ひとり個別の手書きのメッセージを書き、新しい課題や配布物とともに届けた。担任からは、様子を伺う言葉かけや、学校が再開したときに一緒にしたいことなどが書かれており、受け取った児童の嬉しそうな表情が想像できた。

○ 第2回：子どもの「学力も支える」

2回目の「お便り交換」は臨時登校日となり、登校してきた児童へは、担任からの返事を直接手渡しすることができた。そして、新しい葉書を準備した。今回は、心を支えるに加え、学力を支えるというねらいをもち、自由にお便りを書く欄は表面に、裏面には学級担任が趣向を凝らした課題を準備した。

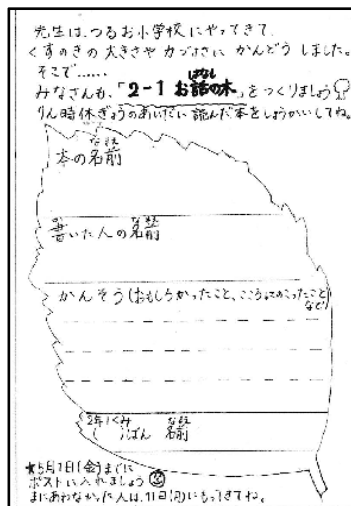
例えば、2年生の「読んだ本の紹介カード」は、児童が休業中に読んだ本の紹介を書いて投函することで、学校に来たときには、みんなの葉書でお話の木が創られるという、離れていても同じなかまだと言うことを感じられる課題であった。

また、6年生は「感染症への偏見に対する考えを書こう」の課題に対して、児童は「ひどいことを言っている人がいたら、『自分が言われたらどうするん。言われている人の気持ちになってみてよ。』と言いたいけど、それには勇気が必要だと思う。」「こんな時期だから助け合うのが普通なのでは。」など、その課題に対して真剣に自分の考えを書いて返信してきた。家庭の中でもこの内容で話をして、家族みんなで差別や偏見について考えを深めるきっかけになったことを感じた。

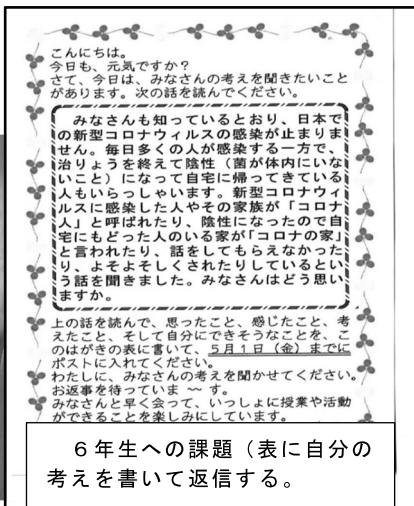
児童が、担任からの課題に応じて葉書に向かっている時間は、相手意識をもち、自分の思いや考えを表出している時間であるといえる。また、担任も子どもを思い、児童理解を深めることができ、臨時休業日に心を支えるお便り交換は、まさしく児童と担任の心をつなぐ取組となった。

〈返信を求めた担任からの課題〉

1年	自分の名前の色ぬり
2年	読んだ本の紹介カードづくり
3年	がんばっていることや知らせたい出来事日記
4年	とけるかなクイズ！先生からのちょうせんじょう
5年	係活動紹介カードづくり
6年	感染症への偏見に対する考えを書こう



2年生への課題と、返ってきた葉書で掲示された「お話の木」



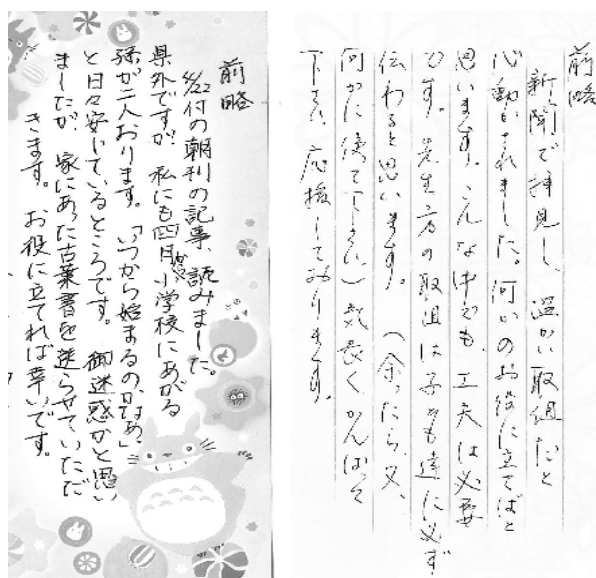
○ 第3回：子どもの「元気を地域に発信する」

児童から返ってくる葉書は、どれもその子の思いが詰まった心温まるものであった。1年生の、まだ字が書けないながら一生懸命書いた富士山の絵と「だいすき」の言葉。「みんなに早く会いたいです。」「おばあちゃんにパンケーキをつくってあげました。」「先生は何が好きですか?」「べんきょうもがんばっています。」…。葉書を見ながら、私たち教員の方が元気づけられた。そこで、3回目は、学校宛ての葉書に加えて往復葉書を一緒に渡し、本来ならゴールデンウィークに共に過ごしていた祖父母や、暫く会っていない友だち、保育所の先生など、自分が大切にしたい人ともお便り交換ができるように計画した。児童からの便りのもつ力を知らせ、児童自らが他の人を元気づける発信をしていき、自分への自信にしてほしいと考えたからである。そして、「お葉書うれしかったよ。ありがとう。」の返信葉書が届いた時、児童は人とのつながりを感じ、自己効力感をさらに高めていけると考えた。

○ 家庭・地域との協働

この「お便り交換」を継続していくにあたって、保護者や地域の関係機関・団体等に学校の取り組みを説明したり、書き損じの葉書等の寄付の呼びかけを行ったりした。その結果、卒業生などからも多くの寄贈葉書が寄せられ、地域の小学校への期待や力強い応援を感じた。

また、この取り組みが、「子どもの心に寄り添う」という見出しとともに、地元新聞社の記事やニュース番組の中で取り上げられた。全校児童150名の小さな小学校に、3600枚を超える葉書が心温まるメッセージとともに届けられたことに、反響の大きさや非常時の教育に対する責任の重さを感じた。



寄贈葉書に添えられた心温まる手紙

3 実践の成果

(1) 実践を通して見えてきたもの

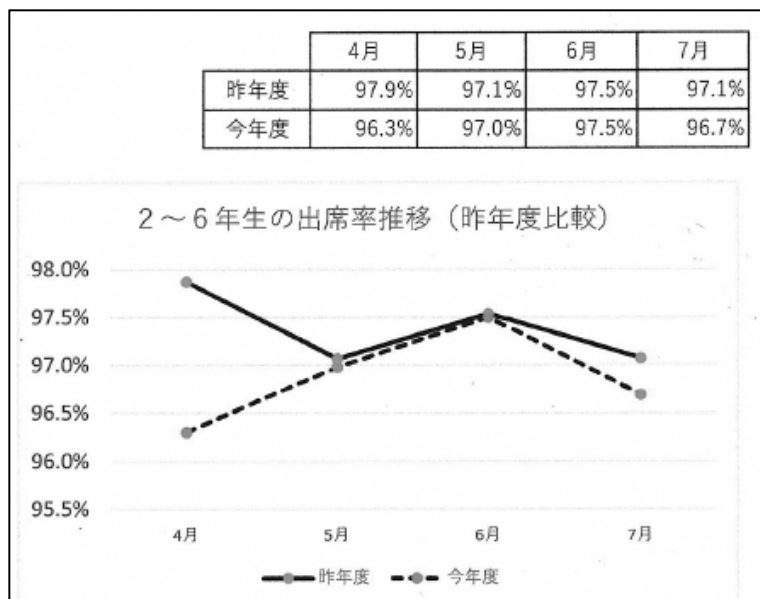
後日、家庭訪問を通して保護者と話をしていく中で、児童は、自分が出した葉書の返事がくる1週間後の「お便り交換」の日を心待ちに、次は何を書こうか考えたり、担任からの返事を保護者に見せたりと、わくわくして取り組んでいた様子を知ることができた。書くことが苦手な児童にとっても、葉書の大きさなら、抵抗感をもたずに書くことができる。また、手書きならではの温かみのある交流は、本来、年度当初に行われるべき児童と教員の関係構築の一助となった。

さらに、担任は返事が来ない児童を気にかけるようになった。返事のない児童を中心に電話連絡をし、児童や保護者と話をしている場面も多くみられた。返事が書けない児童の家庭は保護者がしんどい思いをしていることもある。本校の学校

課題の一つに、家庭の教育力の向上があげられるが、保護者と話をし、最近の様子や気持ちを聴いて共感することで、保護者の心のケアにもつながっていったと感じた。

(2) 学校再開後見えてきたもの

学校再開を心待ちにしていた児童は、学校再開後、落ち着いて学校生活を送ることができた。昨年度の4月から7月の出席率と今年度の出席率を比べてみた。昨年の4月は、新しい学年で意気込んでいる児童が多く、出席率が高かったが、5月で下がっている。反面、今年度は不安定な中での4月の始まりで、欠席が多いスタートだったが、5月、6月と出席率が上がっている。出席率から判断すると、



本校においては、コロナ禍の影響は最低限に抑えられたと考えられる。1番体力が心配な1年生においても、1学期間で「感染症の疑い」を含めてもわずか延べ4人という欠席者数である。今回の取り組みが「学校が楽しみ」「みんなで勉強したい」という心の安定を図ることにつながっていったのではと考えられる。

4 普及させたい取組と期待される効果

「先生あのね お便り交換」は、非常時における児童の心を支えることを目的としてスタートした実践である。しかし、この教員と子どもの葉書のやり取りが、「子どもたちのために」と保護者・地域を動かし、学校全体を支えてもらえる取組になっていった。また、児童が主体となって地域へ発信することで、人と人をつなげ、学校と地域を更につなげ、多方面から関心をもって多くの方が子どもたちを見守ってくださる取組へと広がっていった。さらに、児童にとっても、便りのやりとりや葉書の寄付について知ること、見守ってくれる大人が多いことを感じることもできた。人や地域とのつながりを通して、自己効力感を高めた児童は、今後の教育活動においても、自ら考え実行できる人間性豊かな子どもへと成長していけると確信している。

5 課題及び今後の取組の方向

このような非常時には、児童のみならず保護者も精神的に不安定になっている場合が多い。今後、保護者のニーズを知り、応えていくためには、子どもを核にした連絡方法を工夫し、情報を収集したり発信したりしていきたい。また、地域・保護者・関係機関と協働した「チームとしての学校」となり、コミュニティや文化の拠点として、更に魅力ある校区を創造していきたい。